

『赤と黒』の構造（一）

吉 田 廣

目 次（ゴチック箇所が今回分）

はじめに

第1章 時間構成

第2章 話法

第3章 空間構成

第4章 視点

第5章 語り手と登場人物

第6章 レトリック

第7章 文章構造

第8章 ふたたび時間構成

第9章 ふたたび話法

第10章 ふたたび空間構成

第11章 ふたたび視点

第12章 ふたたび語り手と登場人物

第13章 ふたたびレトリック

第14章 ふたたび文章構造

おわりに

はじめに

私は、2004年に『フランス小説「女の一生」を斬る——小説文の成り立ちを探る——』を大阪経済法科大学出版部から上梓した。そののち、この書の初版第1刷がほぼすべて捌けたのを機会に、改訂改題版『「女の一生」を読み解く——フランス小説の徹底分析——』（以下『読み解く』と略記）を、2008年に同じ出版部から上梓した。この2冊には、表記上の異同があるものの、内実の相違はほとんどない。本稿では、後者を取り上げて、そこで展開された小

説理論を検証してみたい。つまり、その小説理論がほかの作品の分析においてどれほど有効かを確かめたい。

このたび取り上げる素材は、スタンダール作『赤と黒』(1830年刊)の邦訳である。すなわち、小林正氏の翻訳になった、新潮文庫の昭和63年改版上下2巻がそれだ。この分析素材を選んだのは、きわめて偶発的な理由からである。私が『読み解く』を本学の「フランスの文学」という科目で教科書として用いるに先立って、2年ほどで立ち消えになったけれども、1 Semester 15回完結の「教養演習」という科目が設けられていた。この演習科目の担当を依頼された私は、東京大学の学部生であったころから読み親しんできた『赤と黒』を、学生諸君と一緒に味読することにした。

そのための教材をつくるにあたって、授業回数を考慮して、上巻から7つの断章を、下巻からも7つの断章を選び取った。そうして作成した教材がいまも散逸しないで手元に残っているので、それを本稿での分析素材としてそのまま用いたいという次第である。そのうえ、当然のことながら、これらの断章の数は『読み解く』で取り上げた断章の数と一致している。もっとも、『赤と黒』の諸断章を「教養演習」のために選び取ったときには、組織だった分析をそれらに施そうという意図はなかった。学生諸君と楽しく小説文を味わいたいとの漫然とした期待があったばかりである。

それにしても、小説理論の検証ということをお口にすれば、もっと多数の小説を分析の俎上に載せるべきではないかとの反論も聞こえてきそうだ。それはそのとおりかもしれないが、あえて私はそのような野望的な冒険をしようとは思わない。そのような企図が途方もない性質のものであるだけでなく、そもそも分析に伴う演繹的思考に私は重きを置くからだ。

所与の断章を凝視しつつ、それを分析するとき、われわれは単なる腑分けをしているのではない。腑分けをしながらも、諸要素を統合するという志向が、分析者の脳裡では働いているものだ。断章を解剖すると同時に、諸要素を演繹的に把握しようとする知的営為が常に働いている。『読み解く』で明らかにされた諸理論も、分析と演繹の2つの営みの結果にほかならない。対象を分析することによって諸事実を明らかにする帰納的立場に立たなければ、大局的な把

握は成熟してこないし、逆に演繹的に対象をとらえなければ、分析を進めていく方向性が見えてこない。だから、小説文に関する言説も『読み解く』であらかた語り尽くされていると言える。

それでも、新たな素材を取り上げることによって、これまでに明らかにされた概念装置の正しさを確認し、場合によってはそれに多少の変更を加えることができるならば、それは興味に富むことに相違ない。私自身が楽しみながら本稿をまとめていければよいと思う。

第1章 時間構成

● ここまでの梗概

レーナル夫人はヴェリエール町長の妻で、この年30歳である。夫とのあいだに11歳の長男をはじめとして3人の息子がいる。レーナル氏は製釘工場を営む急進党派。下掲のテキストの場面はヴェリエールのレーナル邸でのものであり、時は1820年代後半と推定される。ヴェリエールは語り手が架空に設定した小都会で、フランス東部のフランシュ・コンテ州の州都ブザンソンまで、徒歩で2日かかるところにある。テキストの冒頭文で「若い百姓」と記されているのは、この小説の主人公ジュリヤン・ソレルであり、この年19歳。稀有な記憶力に恵まれ、ラテン語版の『新約聖書』をすべて暗記してしまい、司祭のシェラン神父の愛情を勝ち得ている。テキストの当日の前々日に、レーナル氏はこの若者を住み込みの家庭教師として雇う決心をした。息子たちの躰や教育が、そろそろ自分たち夫婦の手に余るようになってきたからである。また、ことごとくに張り合っている仲のヴェリエール貧民収容所長ヴァルノ氏に、先を越されないためでもあった。

● テキスト (上巻41頁5行目～44頁7行目)

男の見ていないところではいつもそうなのだが、レーナル夫人はしとやかながらも、元気よく、庭に面したサロンのガラス戸を開けて出たとき、ふと玄関の戸口のそばに若い百姓が立っているのに気づいた。まだ子供っぽいうえに、ひどく青白く、泣きやんだばかりといっ

た顔である。まっ白なワイシャツを着て、粗い紫のラシャの、小ざつ 5
ぱりした上着をかかえている。

この百姓の子供があまり色白で、かわいい目をしているので、多少
ロマネスクなレーナル夫人は、はじめ、若い娘が男のなりをして、町
長さんになにかお願いに来たのかもしれないと思った。玄関のところで
立ちどまったまま、思いきって呼び鈴に手を伸ばすこともできない 10
でいるらしい。いかにもあわれな姿でいじらしくなった。レーナル夫
人は、家庭教師が来るというので気がめいていたこともちょっと忘
れて、近寄っていった。ジュリヤンは玄関のほうを向いていたから、
夫人の近づく姿には気がつかなかった。すぐ耳もとでやさしい声がし
たので、びくっとした。 15

「なにかご用、坊ちゃん？」

ジュリヤンは、さっと振り返ったが、レーナル夫人のいかにもあで
やかなまなざしに打たれて、おじけづいた気持ちいくらか忘れてしま
った。やがて、相手の美しさに見とれて、なにもかも、なにをしに来
たのかということさえ忘れてしまった。レーナル夫人はまた同じこと 20
をきいた。

「家庭教師として参りました、奥さま」

ジュリヤンはやっとそう答えたが、涙を流したのが照れくさくて、
しきりに目をこすっていた。

レーナル夫人はびっくりしてしまった。くつつきすぎるほどの距離 25
だったので、二人はお互いに見つめ合うことになった。ジュリヤンは
こんなりっぱななりをしたひとを、ついぞ見たことはなく、とりわけ、
こんな輝くばかりの肌色をした女性からやさしく話しかけられたこと
はなかった。レーナル夫人はこの若い百姓の頬に残っている大粒の涙
を見つめていた。その頬もはじめはひどく蒼白だったのが、今度はす 30
っかり赤くなっている。やがて夫人は、まるで娘のようにはしゃいで
笑い出した。夫人はさきほどの自分自身がおかしくなったし、また自
分がどんなに幸福だか計りしれないという気持だった。まあ、この子

が家庭教師なの！ ろくななりもしてない、薄汚ない坊さんがやってきて、子供たちを叱ったり、鞭でぶったりするものと思っていたのに！ 35

やがて夫人がきいた。

「ほとんどですの、あなた、ラテン語をご存じですの？」

この「あなた」という言葉はジュリヤンには、はなはだ意外だったので、ちょっと考えこんでから、おずおずと答えた。

「はい、奥さま」

40

レーナル夫人はすっかりうれしくなって、ついジュリヤンにいつてしまった。

「あんまり子供たちを叱らないでしょうね？ かわいそうですもの」

「わたくしが、叱るんですって？ どうしてです？」と、ジュリヤンは驚いてきいた。

45

レーナル夫人はしばらく黙っていたが、感情の高まっていく口調で、またつけ加えてきいた。

「あの、あなた、子供たちにやさしくして下さるでしょう？ お約束して下さいますわね？」

二度まで本気で、こんなりっぱな身なりの婦人が、自分を「あなた」 50 と呼んでくれたのだ。これはジュリヤンのまったく予期しないことだった。若者らしい空想はいろいろのことを思い描いてきたものの、自分がりっぱな軍服を着るようになるまでは、だれひとりとして身分の

高い婦人が自分に口をきいてくれることはあるまいと思っていた。レーナル夫人のほうは、ジュリヤンの美しい色艶や、黒い大きな目や、

55

かわいらしい髪にすっかりだまされてしまっていた。その髪は、頭を冷やそうと思って、さきほど広場の噴水の水盤につけたので、ふだんより縮れていた。レーナル夫人としては、このにくらしい家庭教師

が、こわい顔をして、子供たちに当りちらすのではないかとひどく心配していたのに、小娘のようにおずおずしているのです、うれしくて仕

60

方がなかった。レーナル夫人のようなおとなしい心の持主にとっては、これまでの自分の不安と、今日にしているものとが相反している

だけで、これは大事件だった。やっと驚きから立ち直り、こうして、玄関口で、ほとんどワイシャツ姿の青年に、こんなにも間近で応対しているのに、ふと気がついた。

65

「はいりましょう」と、夫人はきまり悪そうにいった。

I 『読み解く』第1章の概念装置

小説の文章において流れている時間は、二重性を有している。語り手の時間と登場人物の時間がそこには同時に存在する。前者は語り手が小説文を紡ぎ出す時間のことであり、読み手が費やす時間と表裏一体の関係にある。『赤と黒』の場合はその所要時間は上下巻を通じて20～30時間程度である。この時間幅は読み手の遅速に応じて変動する。一方、登場人物の時間は、たとえば主人公ジュリヤン・ソレルを例にとれば3～4年程度であって、彼の「実人生」はナレーションの持続をはるかに凌駕している。こうした現象は、ほぼすべての小説文に認められることであって、小説の世界を私たちの日常生活から截然と区別している。その結果として、小説文においては、不可避免的に、時間に関する諸種の振れが生じる。これらの振れの存在が小説文を成り立たせていると言っても誇張ではない。そして、大まかに言えば、性質の違いに応じて3つの時間的な振れが小説文には認められる。

まず、「順序」に関する振れが挙げられる。断章に流れている時間のうえでいろいろな出来事が生起する。そして、大局的に眺めればそれらの出来事は時間の流れにそって喚起される。しかし、細部に注目すると、事情はそれほど単純ではない。大小の「アナクロニズム」が見て取れる。

たとえば、時間軸のうえでの飛躍は小説文に躍動感を与える。それは、言説が突如として過去に言及したり、未来について云々したりする現象のことである。ストーリーをドラマチックなものにするために、過去、現在、未来のあいだを往来しながら、語り手はコントラストの妙味や「期待の地平線」をつくり出していく。

こうした効果は、年譜や年表、事務的文書などに目を通すときに私たちが感

じる無味乾燥さを思い起こせば、如実に窺い知ることができる。想像力を働かせながら時間軸を行き来するスリリングな面白さは、こうした文章からは感得できない。また、驚きを胸にしつつ先を読み進めたいとの欲求も、そこからはあまり生まれてこない。

次に、すでに少し触れたが、「持続」に関する振れがある。概して、小説文の持続時間は、登場人物たちの「実人生」の長さとは比べて極端に短いスパンでしかない。このことは小説文の大きな特徴の一つである。

逆に言えば、この規範に背いている箇所が小説文のなかにあるときは、何らかの効果が狙われている。すなわち、ナレーションの持続と登場人物の持続がきわめて接近していれば、そのぶん臨場感が増す。とりわけ台詞や内的独白の箇所では、語り手は登場人物たちの発話に密着するので、私たち読者の登場人物への感情移入も切実なものとなる。

つまり、語り手は、ときとして登場人物の「実人生」のテンポを減速して、それを自らのナレーションのテンポに近づけようとする。あるいは、等しくしてしまう。そのようにすることで、私たちと登場人物たちとのあいだの距離感を縮小させる。この手法は、小説文が魅力的なものになるための必須条件だと言ってよい。

戯曲は、台詞がほぼ全体を占めているのだから、こうした点では、小説文よりも魅力的ではないかと思う向きがあるかもしれない。はたして、これには一理ある。けれども、少なくとも2つの点で、小説文のほうが私たちをより強烈に惹きつける。

1つには、小説文の語り手は、自由自在に登場人物たちの心理に忍び入ることができる。徹底した心理描写を行うことができる。これは、戯曲という文学形式のなかでは不可能なことである。

もう1つには、小説文で喚起される時空のほうのがはるかに雄大である。壮大な時空のなかに布置された登場人物たちに、読者は自己を同化して、彼らを取り巻く時空を享受できる。これは、種々の制約に縛られている戯曲ではとうてい不可能なことである。時空の壮大さは、概して実人生の「持続」がナレーションの「持続」を大きく凌駕するという小説文の時間的特徴と、不可分の関係

にある。

最後の振れとして指摘しなければならないのは「頻度」である。小説文を構成する出来事は、唯一的なものと反復的なものと大別される。さらに、語り手が所与の出来事に1回だけ触れている場合と、複数回にわたって言及している場合とがある。

反復的な出来事に語り手が1回だけ触れていれば、それはそのほかの出来事を際立たせる背景となる。そうではなくて、そのような出来事に2回以上言及していると強調効果が生まれる。

一方、唯一的な出来事が複数回にわたって喚起されると、やはり強調効果が生まれて、出来事が重要性を帯びてくる。また、唯一的な出来事に1回だけ言及すると、それは、その出来事が読者の胸に鮮明なイメージとして永くとどまる可能性を生み出す。

このように、一方では、出来事に認められる唯一性と反復性、他方では、表現レベルにおける一回性と頻出性が、いろんなふうに組み合わせられ、それらの形態が織り込まれて成立するのが小説文である。こうしたメリハリやバリエーションは小説文の魅力を醸し出し、それを増幅する。

新聞、解説書、教科書といった、日常的な情報伝達を目的とする言説では、伝達の効率性が重視され、頻度に関する修辭的ファクターが蔑ろにされる。早い話が、小説文では、主人公をはじめとする重要な登場人物についての事柄が頻繁に語られる。彼らの生活に語り手が反復的に言及している。こうした伝記的な要素は、新聞記事などにはあまり認められないものである。

II テクストの分析

本章のテキストの冒頭には「男の見ていないところではいつもそうなのだ、レーナル夫人はしとやかながらも、元気よく、庭に面したサロンのガラス戸を開けて出たとき、ふと玄関の戸口のそばに若い百姓が立っているのに気づいた」とある。ここでは、レーナル夫人の習慣的過去に突発的現在が入り込もうとしている経緯が述べられている。ジュリヤン・ソレルを見初めるレーナル

夫人の心のなかで、日常性が突き崩されようとしている様子が描かれている。夫人の心理面におけるそれだけの急激な変化の可能性を、語り手は「ふと」の1語に込めている。

11行目から13行目にかけての一文も、同様な効果を醸し出している。「レーナル夫人は、家庭教師が来るというので気がめいていたこともちょっと忘れて、近寄っていった」の文には、「気がめいていた」という、継続的過去を指す言葉がある。ところが、「それをちょっと忘れた」という突発的現在によって、過去のその継続性が断絶される。

事情はジュリヤンの場合にも同断である。前段の引用文の直後には「ジュリヤンは玄関のほうを向いていたから、夫人の近づく姿には気がつかなかった。すぐ耳もとでやさしい声があったので、びくっとした」とある。この瞬間まで貴族の邸宅を訪問することに逡巡していたジュリヤンの耳に、「やさしい声があった」のである。「びくっとした」との反応をする束の間、その逡巡の気持ちが中断されている。その中断は17行目からの1段落で継続の様相を帯びてくる。いわく「ジュリヤンはさっと振り返ったが、レーナル夫人のいかにもあでやかなまなざしに打たれて、おじけづいた気持もいづらか忘れてしまった。やがて、相手の美しさに見とれて、なにもかも、なにををしに来たのかということさえ忘れてしまった」との言説は、ジュリヤンがレーナル夫人に寄せる恋慕の情の突然の湧出を端的に述べている。

以上の事例は、一定の過去の持続がにわかに止むという様相を述べている点で共通している。読み手は、そのときの登場人物の心理に同調して、驚きを彼らと分かち合う。登場人物の心に湧き起こる激変を切実に受け止める。彼らの習慣や日頃の心性が突き崩されるコントラストに身を委ねる。つまり、こうした対照的記述においてこそ、読み手は登場人物に深々と感情移入を行う。

ところで、過去から現在への飛躍のほかにも、現在から未来への移行、さらには未来から現在への舞い戻りといった様相を呈する箇所が、ここの断章には認められる。

50行目からの件「二度まで本気で、こんなにっぱな身なりの婦人が、自分を『あなた』と呼んでくれたのだ。これはジュリヤンのまったく予期しないこ

とだった。若者らしい空想はいろいろのことを思い描いてきたものの、自分がりっぱな軍服を着るようになるまでは、だれひとりとして身分の高い婦人が自分に口をきいてくれることはあるまいと思っていた」は、ジュリヤンが野心的な人物であること、上級軍人になる望みを持っていることを明確に表している。つまり、軍隊の階梯を上り行き、貴族の婦人と言葉を交わすことを夢見ていることを明白に述べている。その自らの将来性に期待する心根が、純真なレーナル夫人の言葉によって出鼻を挫かれた恰好になった。言説の対象が未来から現在へと反転しているわけである。

この引用箇所の直後には「レーナル夫人のほうは、ジュリヤンの美しい色艶や、黒い大きな目や、かわいらしい髪にすっかりだまされてしまっていた」との1文がある。ジュリヤンの肌や目や髪に、どのように夫人がすっかり騙されたというのであろうか。これらの表面上の特徴と、それらの特徴が如実に表しているかに見える心性に、夫人がすっかり惚れ込んだということであろう。しかし、前段でも見られたように、当のジュリヤンは「りっぱな軍服を着る」ことに憧れている野心家である。偽善を貫き通して出世することを第一と考えている。それなのに、青年の外貌の美しさがレーナル夫人の心をとらえてしまった。その結果として、夫人はジュリヤンとの不倫の恋に身を焦がすことになるわけだが、このテキストのあとを原本で辿らないまでも、読み手はその後の展開をかなりなまでに予測できる。言い換えれば、「だまされてしまっていた」との片言隻句は、ストーリー展開を読者に予知させ、この断章に登場する二人の未来を如実に予告している。

この間の事情は、このテキストを締め括る2文「やっど驚きから立ち直り、こうして、玄関口で、ほとんどワイシャツ姿の青年に、こんなにも間近で対応しているのに、ふと気がついた。／『はいりましょう』と、夫人はきまり悪そうにいった」からも明らかである。恋慕の情は人の心を秘密裡へと導く。人は、往々にして自分の恋心を秘匿しておきたいと念じる。そう思うのが本来なのに、わけても夫のあるレーナル夫人は「玄関口で、ほとんどワイシャツ姿の青年に、こんなにも間近で対応して」いたわけだ。だから、夫人の「きまり悪さ」は、自らの恋慕の情を赤裸々に表出している。勢い、読者は、彼女の恋心がい

つになったら成就されるのかを、重大な関心事として胸に抱くことになる。彼女の未来において出来るはずの交情に思いを馳せることになる。「期待の地平線」が立ち現れるわけだ。

小説の断章は、時間軸のうえに空いた窓のようなものである。「現在」は、窓から見える限られた景色である。その景色は世界の一区切りだ。それは過去の素因の結果であり、将来の変化を予兆する。われわれ読者は、窓によって区切られた空間を眺めつつ、その景色の素因と予兆を探りを入れる。

*

ジュリヤンとレーナル夫人の邂逅を描くこの断章は、持続時間の点で特異な性質を有している。すなわち、語り手の持続と登場人物の持続とのあいだに特段の差異が認められない。

たとえば、11～13行目の「レーナル夫人は、家庭教師が来るというので気がめいていたこともちょっと忘れて、近寄っていった」より前の箇所では、ジュリヤンの容姿についてのレーナル夫人による観察が詳述されている。だから、ここの箇所に限って言えば、登場人物の持続が短くなって、語り手の持続にほとんど重なり合っている。

同様のことは16行目からの2人の遣り取りについても言える。演劇との類似性に着目するならば、11行目の「レーナル夫人は、家庭教師が来るというので」云々から最終行の『はいりましょう』と、夫人はきまり悪そうにいった」までの50数行は、一つの場面だととらえることができる。だから、ここの箇所はそのまま脚本として用いられ得ると言ってよい。対話での発話の部分はもちろんのこと、2人のそれぞれの表情や心理もまた、演技の材料だと見ることができる。

もちろん、小説文の件であるにしろ、演劇の1つのシーンであるにしろ、速読に慣れた人がここの箇所に目を通せば、ものの2分で事足りるだろう。それとは逆に、一字一句に注意を怠らない慎重な読者であれば、実際には5分間のシーンであっても、8分ほどの時間をかけて熟読するかもしれない。

このように現実の読み手の遅速にはばらつきがあるので、理念上の読者という存在を思い浮かべるのは容易なことではない。黙読の場合もそうであるが、

音読の場合にも同断である。また、理念的なナレーターなどという存在もまた曖昧なものである。

それでも、ここの断章は、相対的にストーリーが緩やかに流れていると言える。語り手はこの場面をそのぶん重要視している。それと同時に、われわれ読者もここの箇所を印象的なものとして受け止める。つまり、ジュリヤンとレーナル夫人の出会いを、ストーリー上の重要な結節点だと認識する。

それにしても、ほんの数分で読むことのできるシーンを、語りの速度が緩やかなものとして認識させる、ナレーターの技巧には注目するべきであろう。というのも、2人の登場人物の具体的な遣り取りは、ほんの七、八行に過ぎないからである。どのような技巧を用いて、語り手は、ナレーションの速度の緩やかさというイリュージョンを醸し出しているのだろうか。

1つには、時間の経過を表す片言隻句が随所に布置されている。19行目の「やがて」、23行目の「やっと」、31行目の「やがて」、36行目の「やがて」、39行目の「ちょっと考えこんでから」、46行目の「しばらく」、63行目の「やっと」がそれらである。持続にかかわるこうした語句を差し挟むことによって、語り手は緩やかさの幻想を生み出している。

もう1つには、2人の登場人物の視点を羅列するという手法が3箇所で行われている。1例を挙げるにとどめておくならば、50行目からの「二度まで本気で、こんなにりっぱな身なりの婦人が、自分を『あなた』と呼んでくれたのだ。これはジュリヤンのまったく予期しないことだった。若者らしい空想はいろいろのことを思い描いてきたものの、自分がりっぱな軍服を着るようになるまでは、だれひとりとして身分の高い婦人が自分に口をきいてくれることはあるまいと思っていた。レーナル夫人のほうは、ジュリヤンの美しい色艶や、黒い大きな目や、かわいらしい髪にすっかりだまされてしまっていた。その髪は、頭を冷やそうと思って、さきほど広場の噴水の水盤につけたので、ふだんより縮れていた」の箇所では、まずジュリヤンの心理が描写され、そののちにレーナル夫人の内心が喚起されている。異なる2人の人物の内面を同時に述べるのが不可能だという小説文の弱点を逆手に取って、語り手はストーリー展開の緩慢さを醸成する。そうすることによって、シーンの臨場性を高めてい

く。これは語り手の面目躍如たる一面である。

*

テキストの冒頭の1文「男の見ていないところではいつもそうなのだが、レーナル夫人はしとやかながらも、元気よく、庭に面したサロンのガラス戸を開けて出たとき、ふと玄関の戸口のそばに若い百姓が立っているのに気づいた」は、頻度の点で決定的に重要である。レーナル夫人のこのときまでの「元気のよさ」と、ジュリヤンとの邂逅ののちに始まる「恋慕の苦しみ」が、強いコントラストを成すからである。けだし、日常性のなかにドラマが芽吹いてくるのは、小説文にあっては常套的な成り行きだ。

はたして、その直後の「まだ子供っぽいうえに、ひどく青白く、泣きやんだばかりといった顔である。まっ白なワイシャツを着て、粗い紫のラシャの、小ざっぱりした上着をかかえている」の2文には、レーナル夫人によるジュリヤンの仔細な観察のほどが表れ出ている。夫人はジュリヤンの容貌と服装に観察の眼を注いでいる。この箇所を読むだけでも、レーナル夫人の日常性に特異な素因が忍び入ってきたことが窺える。

この「ジュリヤンの容姿」というテーマは次文にも受け継がれている。「この百姓の子供があまり色白で、かわいい目をしているので、多少ロマネスクなレーナル夫人は、はじめ、若い娘が男のなりをして、町長さんになにかお願いに来たのかもしれないと思った」との言説のなかに見える「あまり色白で、かわいい目をしている」という表記は、レーナル夫人の心がジュリヤンの容貌によって絡め取られていく様子を如実に喚起している。続く2文でも事情は同じであって、「玄関のところで立ちどまったまま、思い切って呼び鈴に手を伸ばすこともできないらしい。いかにもあわれな姿でいじらしくなった」では、特に後者の文のなかで、ジュリヤンに対するレーナル夫人の情愛の芽生えが直截的に述べられている。

こうして、「ジュリヤンの容姿」と「レーナル夫人の情愛」という2つのテーマが、表現レベルでは1度限りの反復的内容、すなわち邂逅まえの夫人の「元気のよさ」を背景に、色濃く表出されている。

それは、次文「レーナル夫人は、家庭教師が来るというので気がめいって

たこともちょっと忘れて、近寄っていった」についても同断である。「気がめ
いていた」という表現上では1度限りの内容が、「忘れて、近寄っていった」
という「情愛」のテーマによって突き崩されている。内容上の反復性を背景に
して、いま現在の出来事が浮き彫りにされている。

続く2文「ジュリヤンは玄関のほうを向いていたから、夫人の近づく姿に
は気がつかなかった。すぐ耳もとでやさしい声があったので、びくっとした」で
は、読者は主としてジュリヤンに感情移入を行う。けれども、「やさしい声」
という字句が、やはり「レーナル夫人の情愛」に触れている。

このように、表現上では一度限りの反復的内容を背景に、複数回にわたって
喚起されるテーマが効果的に強調されている。また、「ジュリヤンとレーナル
夫人の邂逅」というテーマは、ここの断章において特有である。つまり、『赤
と黒』の全体を射程に入れるならば、それは優れて一回的なものだ。もっとも、
上巻119頁14行目～120頁4行目には次のような件がある。

急にそう決心すると、今度はふざけてやろうという気を起した。《どう
しても、このふたりの女のうち、どっちかをものにしてやろう》考えてみ
ると、デルヴィル夫人を口説いたほうがずっとおもしろいことになる。こ
の夫人のほうが気にいったからではなく、この夫人が、あくまで学識を買
われた家庭教師として、自分を見ており、はじめてレーナル夫人の前に出
たときの、粗いラシャの上着をまるめて小脇にかかえた、製材小屋の職人
としては見ていなかったからである。

ところが、レーナル夫人がいちばんかわいく思っているジュリヤンの姿
は、耳のつけねまで真っ赤にして玄関の前にたたずみ、呼び鈴を押すこと
さえできないでいた、あの若い職人姿にほかならなかった。

一回限りのシーンを表すかに思われた本断章が、約80頁を隔ててふたたび息
吹いている。ストーリー上では10箇月ほどの隔りがある。そのあいだレー
ナル夫人が愛しく思い続けたジュリヤンの姿が、ほかならない本断章のそれ
であり、一方、ジュリヤンはそのときの自分の姿を屈辱的なものとして受け止
めていたわけだ。その意味では、「2人の邂逅」のテーマは、彼らの記憶のなか
で永続的なものであったと言える。それでも、「邂逅」という主題の性質から

言って、臨場性は本断章のほうが勝っている。

以下、テキストの各文を逐一論うことはやめるが、男女の突然の邂逅がこの断章において詳細に描かれている。日常性の断絶が、ジュリヤンにとってもレーナル夫人にとっても、きわめて印象的であった様子が、最終行に至るまで描出されている。そういうものとして、ここの断章の全体は、『赤と黒』のなかでも特異な性質を帯びている。男女間の情愛の湧出という出来事が、ここのテキストで審らかに述べられている。

残る反復の内容が複数回にわたって述べられるケースについては、断章の最後の2文「やっと驚きから立ち直り、こうして、玄関口で、ほとんどワイシャツ姿の青年に、こんなにも間近で応対しているのに、ふと気がついた。／『はいりましょう』と、夫人はきまり悪そうにいった」に注目しよう。

この2文では、「ふと気がついた」と「きまり悪そうに」という2つの心理的变化が喚起されている。第1文では尋常の心持ちをレーナル夫人がいくぶん取り戻すことが、第2文ではその結果がそれぞれ記されている。こうした表記法ではあっても、結局はテーマを強調的に言い表すうえで効果的である。表記のうえで、また、それぞれの表記が直接的に言及している内容のうえで、この2文は確かに相違しているにもかかわらず、「レーナル夫人の恋慕」というテーマがその相違を包摂している。

Ⅲ まとめ

ここの断章では「男女の邂逅」が描き出されている。その言説は確固とした時間構成を基にして記されている。「順序」の点では、ジュリヤンもレーナル夫人も来るべき出来事に恐れを抱いていたのに、その恐怖感が両者にあつたたちまち突き崩されるという対句構造が、ここの断章の支えとなっている。「持続」の点では、文庫版で3頁ほどのナレーションの時間のなかで、ここの言説には、「実人生」を緩やかに流れさせる技巧が施されており、読者はそのぶんジュリヤンとレーナル夫人に感情移入をしやすい。「頻度」の点では、特に2人の日常に特異なものが忍び入ることが強調的に描かれている。

いわゆる「時間」とは、「順序」と「持続」と「頻度」に基づく概念だと考えられる。はたして、テキストの意味の掘り起こしに、これらの諸概念が有効だということが、前節の分析を通じて再確認できた。また、こうした意味の掘り起こしこそが、断章凝視の醍醐味だとも言える。特定の角度から所与のテキストを見つめると、そこからは湧水のように意味が溢れてくる。視座を固定して断章に迫れば、豊饒なまでに意味を取り入れることができる。

このようにして『読み解く』第1章の分析と同様なことが確認されたわけだが、『読み解く』のテキストと本章のテキストのあいだでは、特に「持続」において趣が異なっている。『読み解く』第1章のテキストでは、5時間ほどの「実人生」が3頁で描かれていたのに対して、本章のテキストはテンポが著しく緩慢である。男女の邂逅を綿密に描くという姿勢が、後者で取られているからだ。つまり、テーマの如何によって時間の扱われ方に違いが生じる。それは、異なる小説のあいだであっても、同一の小説の断章どうしのあいだであっても、自然とそうなるべきものなのだろう。

第2章 話法

● 前章からの梗概

この場面は、ヴェリエール近郊の美しい村ヴェルジーにある古い城でのもの。レーナル氏はこの城を別荘として所有しており、春たけなわの頃から一家でその別荘に移り住んできた。ここの箇所は、それから数箇月たった真夏の一夜の出来事を主に描いている。九箇月ほど前に住み込みの家庭教師として雇われたジュリヤンも、ここに一緒に滞在している。レーナル夫人は、周囲の金銭づくの人間たちとは対照的に高潔さを持している若いジュリヤンに、当初から好意を感じていたが、この頃には罪のない恋心さえ抱くようになっていく。ジュリヤンのほうは、夫人を美しい人だとは思っているが、まだ恋の対象としてはとらえていない。レーナル氏はヴェリエール町長という役職からヴェルジーを留守にすることが多く、この日も不在である。酷暑の時候とあって、レーナル家では、毎晩、庭の大きな菩提樹の下の暗がりです涼みをする習慣となっている。ところが、ジュリヤンはふとした拍子に

レーナル夫人の手に触れた。その手は素早くひっこめられたが、そのときジュリヤンは手をひっこめさせないようにするのが自分の義務だと堅く心に決める。「その翌日、ジュリヤンが異様な目つきをしていた」のは、すっかりその義務感の虜になっていたためである。

● テキスト (上巻 81 頁 8 行目～ 84 頁 8 行目)

その翌日、レーナル夫人と顔を合わせたとき、ジュリヤンは異様な目つきをしていた。これから戦わなければならない敵を前にでもしたかのように、彼女をにらみつけた。前夜とはうって変わったこのまなざしは、レーナル夫人を狼狽させた。やさしくしたはずなのに、腹をたてている様子なのだ。彼女はジュリヤンから目をそらすことができな 5
かった。

デルヴィル夫人がいるおかげで、ジュリヤンはあまりしゃべらないですみ、頭にあることを、それだけ深く考えてみることができた。その日一日、精神をきたえてくれる例の感銘深い本を読むことだけが彼の 10
仕事だった。

子供たちの勉強をひどく早目に切り上げた。やがて、レーナル夫人の姿を目にして、名誉を守るべき立場にあることをはっきり自覚すると、今夜はどうあっても、握った手をひっこめさせないようにしなければならぬと決心した。

陽が沈んでいき、問題の時刻が迫ってきた。ジュリヤンの心臓は異 15
様に高鳴った。夜になった。今夜はまっくらになりそうだと知って、胸の重荷を取りのぞかれたように、ほっとした。大きな雲がむし暑い風を受けて乱れ飛び、嵐を呼ぶ空模様。ふたりの女は遅くまで散歩を続けた。その夜はふたりのふるまいが、ことごとくにジュリヤンには妙な気がした。ふたりはこの天候を楽しんでいるのだ。デリケートな心 20
をもつもののなかには、こういう天候になると、愛する喜びがますます思うものがある。

やっと腰をおろした。レーナル夫人はジュリヤンの横に、デルヴィ

ル夫人は親友のそばに。ジュリヤンはこれから決行しようとする
ことが気になって、なに一ついい出せなかった。会話ははずまない。 25

《決闘することにでもなったら、はじめはやっぱりこんなにふるえたり、情けない気持ちになるのだろうか?》と、ジュリヤンは考えた。なにしろ、自分のことでも他人のことでも、ひどく疑い深いので、自分の心境がわからないはずはない。

あまりの苦しさに、どんな危険でもこれよりはましだと思われた。 30
なにか急に用事ができて、レーナル夫人がやむをえず庭を離れて、家に戻るような事態になってくれればいいと、いくたび思ったかしれない。自分の気持を抑えようとやきもきしているうちに、声音がふだんとはひどく変ってきた。まもなく、レーナル夫人の声音もふるえをおびてきたが、ジュリヤンはそれに気がつかなかった。義務が気おくれ 35
と交える必死の果合いはあまりにも苦しかったので、自分以外のものに目をくれる余裕がなかった。九時四十五分が屋敷の大時計で鳴りおえたが、まだなんらの行動にも出ていなかった。ジュリヤンは意気地なしの自分に愛想をつかしてつぶやいた。《十時が鳴りだすと同時に、やっつてのけよう。一日じゅう、今夜やろうときめていたじゃないか。 40
でなけりゃ、部屋にひき返して、ピストルで頭をぶち抜くんだ》

ぎりぎりの期待と不安のひとつときが過ぎる。その間、ジュリヤンは興奮のあまり我を忘れてしまった。いよいよ真上の大時計が十時を打ちはじめた。運命を決する鐘の音が、鳴るたびに、彼の胸に響きわたり、いわばつきさすような衝動を起した。 45

ついに、最後の鐘が十時を打ち終わろうとする前に、ジュリヤンはつと手を伸ばして、レーナル夫人の手を握った。夫人はすぐに手をひっこめた。彼は自分がなにをしているのかわからなくなって、またその手をとらえた。自分自身ひどく興奮しているながら、彼は握った手が氷のように冷たいのに驚いた。ふるえる手に力をこめて、その手を握りしめた。相手はもう一度ふりほどこうとする気配を見せたが、とうとうその手は委ねられたままになった。

ジュリヤンの心はうれしさにあふれた。レーナル夫人に恋しているからではなく、たえられない責苦がやっとなんだからである。デルヴィル夫人に感づかれないように、口をきかなくてははいけないと思っ 55
た。大きくて、はりのある声が出た。これに反して、レーナル夫人の声ははげしい興奮を包みきれなかった。デルヴィル夫人は気分が悪くなったのかと思って、家に戻ったらと促した。ジュリヤンは危険を感じた。

《レーナル夫人がサロンへ戻れば、昼間味わったような苦しい立場に 60
また立ち返ってしまう。なにしろほんのわずかのあいだこの手を握っただけだから、これでひとつ勝利を確保したとはいえない》

デルヴィル夫人がサロンへ戻ったらと再び促したとき、ジュリヤンは自分に委ねられていた手をぐっと握りしめた。

レーナル夫人は腰をあげかけていたが、すわり直して、消えいりそ 65
うな声で、「たしかにすこし気分が悪いんですけど、風に当たっていたほうが気持ちいいの」

この言葉でジュリヤンの幸福は確かなものとなり、このとき、それは絶頂に達した。

I 『読み解く』第2章の概念装置

小説の文章は、話法的部分と非話法的部分とに分けられる。前者は登場人物の発話行為に言及するものであり、鉤括弧で括られている箇所、いわゆる「直接話法」に代表される。「直接話法」以外は「地の文」である。

この「地の文」は、さらに、登場人物の発話を前提としている部分と、それを前提としていない部分とに分けられる。後者は、たとえばストーリー展開と直接的には関係のない空間描写を思い起こせばわかりやすいだろう。あるいは、登場人物がすっかり理性を失っている場面も、それに該当する。これに対して、前者には次の4つのタイプのものがある。

第1に、「発話行為」が言及される部分がある。たとえば、「言い訳した」と

だけあって、具体的にどのような言葉が発せられたかが、文面に表れていないなどの場合がそれである。

第2に、「発話内容」が取り上げられる部分がある。発話行為の様相が表れておらず、もっぱら登場人物の話の内容が要約されている場合がそれである。

以上の2つの話法には共通点がある。ストーリーを迅速に進めるための便宜的な性格が強いことである。すなわち、個々の発話がそういうものとして記述されたら、ストーリー展開の緊迫性が減殺されるだろうというときに、これらの話法が用いられる。

第3に「間接話法」が挙げられる。この話法は控え目な直接話法だとも言うべきものであり、そこからは発話の内容も発話の様態も読み取ることができる。それでは語り手がなぜ「直接話法」ではなくて「間接話法」を用いるのかとの疑問が浮かんでくるが、たとえば、ストーリー・ラインのうえで画期的な発話が「直接話法」で表され、それほど重要性のない発話が「間接話法」で表現されるなどということが容易に想像できる。

第4に「自由間接話法」がある。これは、登場人物がひとりであるときや、周囲の人たちから気を逸らしているときに採られる話法である。「直接話法」が最も分節化された物思いを表象する一方で、「自由間接話法」は、多かれ少なかれ分節化の度合いが低い物思いを喚起する。そこでは、明瞭には分節化されていない登場人物の物思いを、語り手がはっきりと分節化された言葉で描き出す。だから、これは多分に修辭的な表現手段である。けれども、反面において、この「自由間接話法」におけるほど、登場人物と読者の距離が狭まる文章箇所はほかにないのも事実である。読み手はここにおいて登場人物に自己を密に同調させる。

これらの「地の文」の話法と一線を画すのが「直接話法」である。ここにおいては、鉤括弧を用いて「地の文」と明確に区別されたかたちで、登場人物の口にする言葉が提示される。そこからは登場人物の気質を如実に窺い知ることができる。いわば、「直接話法」にはポートレート機能がある。また、「直接話法」は状況喚起機能をもはたす。つまり、その場の雰囲気、登場人物相互の心

理的関係、個々の登場人物の心情などを表す。

さらに、「直接話法」にはストーリー展開機能というものもある。ストーリー展開の契機となるのが「直接話法」である場合には、語り手による物語の恣意性が薄められる効果がある。つまり、その場合には、登場人物たちが自らストーリーを紡ぎ出しているという印象を、私たち読者は強く抱く。これはまさしくイリュージョンにほかならない。

もっとも、どのような文章家であれ、自分がすでに書き記した箇所に多少なりとも緊縛されるのが常であり、おかしな言い草かもしれないが、語り手の筆が登場人物たちによって導かれていくという側面も無視することはできない。これは何も小説文に限ったことではなく、随筆文や詩文などについても同様に言えることである。

II テクストの分析

思考は、激しい情動が介在している場合を除けば、言葉を用いてなされる。だから、明瞭な発話が記されていない文章箇所であっても、登場人物が思ったり考えたりするところでは、発話行為がなされていると言える。

たとえば、本文の最初の1段落「その翌日、レーナル夫人と顔を合わせたとき、ジュリヤンは異様な目つきをしていた。これから戦わなければならない敵を前にでもしたかのように、彼女をにらみつけた。前夜とはうって変わったこのまなざしは、レーナル夫人を狼狽させた。やさしくしたはずなのに、腹をたてている様子なのだ。彼女はジュリヤンから目をそらすことができなかった」には、話法的箇所と非話法的箇所とが混在している。

ここでの語り手は主にレーナル夫人に感情移入を行っている。第1文の「その翌日、レーナル夫人と顔を合わせたとき、ジュリヤンは異様な目つきをしていた」は、夫人による観察を表している。ここにおいてレーナル夫人は「ジュリヤンの異様な目つき」に驚いているのだから、そこには理性の働く隙はない。だから、これは非話法的な文だと言える。その間の事情は、次文「これから戦わなければならない敵を前にでもしたかのように、彼女をにらみつけた」

についても同じある。さらに、その直後に続く「前夜とはうって変わったこのまなざしは、レーナル夫人を狼狽させた」についても同様のことが言えるが、この文の特徴として、夫人の心境が露に名状されていることが挙げられる。すなわち、「狼狽」という言葉が端的にレーナル夫人の内面を指呼している。この文の内実は、続く2文によって敷衍されている。もっとも、この2文のうちの最初のもの「やさしくしたはずなのに、腹を立てている様子なのだ」では、夫人によるジュリヤンの客観的な観察が述べられていて、そこには話法的な性質が垣間見られる。

レーナル夫人が言葉を発し得ないのは、もっぱら感性によって脳裡が支配されているからであって、この段落を見るかぎり、ジュリヤンとレーナル夫人とのあいだに対話が成立する隙がない。この段落がむしろ非話法的な言説である所以である。

続く2つの段落では、語り手は一転してジュリヤンに自己を同化させている。11行目からの「やがて、レーナル夫人の姿を目にして、名誉を守るべき立場にあることをはっきり自覚すると、今夜はどうあっても、握った手をひっこめさせないようにしなければならぬと決心した」の1文にある「自覚する」と「決心した」は、発話行為と発話内容の両方に触れている。だから、これらは間接話法に近い表記だと言える。『『名誉を守らねばならぬ』とはっきり自覚した』『『今夜はどうあっても、握った手をひっこめさせないようにしなければならぬ』と決心した』というふうに、それぞれ書き換えられることからそれは歴然としている。ただし、「自覚する」や「決心する」は、このように発話内容に触れるものではあっても、発話の様相を具体的に表すものではない以上、これらの件を完全には間接話法と同一視することができない。むしろ、その様相なるものは、いわば心のなかに沈澱している言葉以前の思いだと思ふべきである。

これに反して、57～58行目の「デルヴィル夫人は気分が悪くなったのかと思って、家に戻ったらと促した」と63～64行目の「デルヴィル夫人がサロンへ戻ったらと再び促したとき、ジュリヤンは自分に委ねられていた手をぐっと握りしめた」は、両方とも「促す」という発話動詞を伴っている。ここ

の断章にあっては、この2例が雄弁な間接話法である。

それでは、なぜ語り手はこの箇所に鉤括弧をあてがって、それぞれを直接話法に仕立てなかったのだろうか。言うまでもなく、この断章での唯一の直接話法である66～67行目の「たしかにすこし気分が悪いんですけど、風に当たっていたほうが気持ちがいいの」というレーナル夫人の言葉を引き立てるためである。

デルヴィル夫人の言葉を、それぞれ「『家に戻ったら』と促した」「『サロンへ戻ったら』と再び促した」というふうに鉤括弧で括ると、66～67行目の直接話法の意味深長さが殺がれてしまうことだろう。語り手は、この直接話法において断章のクライマックスを築こうとしている。そのために、そのほかの話法を控え目に表すという手段に徹している。このようにこの断章がクライマックスで終わっているのは、68～69行目の「この言葉でジュリヤンの幸福は確かなものとなり、このとき、それは絶頂に達した」との強調的言辞からも明らかである。

*

テキストの26～27行目には「《決闘することにでもなったら、はじめはやっぱりこんなにふるえたり、情けない気持になるのだろうか?》と、ジュリヤンは考えた」という1文がある。この文はかなり作為的である。私たちが普段ものを考えるときには、これほど整った言葉を心のうちで発しないものだ。考えや思いは、言葉によってなされるにしても、数語ずつの断片としてしか、私たちの心中に去来しない。水面に浮かんで消える水泡のようなものだ。文章に書き表されたり、口頭で発せられたりすることによって、はじめて明確な輪郭を備えた言葉となる。

だから、前段のジュリヤンの言葉も、口から発せられていない以上、実際には、言葉の断片の緩やかな集合であるはずだ。語り手はそれを整然とした言い回しに加工しているのである。そのように考えると、ギユメ(《 》)で括られた「決闘することにでもなったら、はじめはやっぱりこんなにふるえたり、情けない気持になるのだろうか?」の箇所は、ほとんど一種の自由間接話法だと見なすことができる。はたして、「と、ジュリヤンは考えた」の部分削除し

ても、文章の流れに特段の支障を来さない。

そうであるならば、たとえば31～33行目の「なにか急に用事ができて、レーナル夫人がやむをえず庭を離れて、家に戻るような事態になってくれればいいと、いくたび思ったかしれない」なども、ギユメが用いられていないという相違こそあるものの、同様の理由から自由間接話法に限りなく近いと見なせる。「と、いくたび思ったかしれない」という伝達動詞的な言い回しはあるが、ここにおいて読者はジュリヤンの気持ちに自己を切実に同化させるわけだから、ここもまた一種の自由間接話法だと断ずることができる。

しかし、登場人物の内面の動揺があまりに激しいと、水泡のような言葉すら彼らの脳裡に浮かばなくなる。その間の事情は42～52行目の2つの段落において明らかである。「ぎりぎりの期待と不安」(42行目)、「興奮のあまり我を忘れてしまった」(43行目)、「つきさすような衝動」(45行目)、「自分がなにをしているのかわからなくなって」(48行目)、「ひどく興奮していながら」(49行目)などと、ジュリヤンの激しい動揺を喚起する言葉が鏝められている。ここは優れて非話法的な箇所である。そして、表記の反復性のために、私たち読者もまた強い情動を覚える。

*

直接話法は、言説のなかにあって、レリーフのように登場人物たちの言葉を浮き彫りにする。戯曲とは異なり、小説文では、この話法は濫用されることがない。多々ある話法のなかで、ナレーターは、最大の効果が醸し出されるように直接話法を用いる。

すでに言及したように、ここの断章での唯一の直接話法「たしかにすこし気分が悪いんですけど、風に当たっていたほうが気持ちいいの」(66～67行目)は、続く「この言葉でジュリヤンの幸福は確かなものとなり、このとき、それは絶頂に達した」(68～69行目)との非話法的な1文とともに、本テキスト全体のクライマックスを形成している。ここに至るまでにも、種々の話法が用いられていたが、それらは鉤括弧で括られることがなかった。それらの話法は、ここの直接話法に至るための布石のようなものだったと言える。

菩提樹の蔭で夕涼みをしている3人のあいだで、このクライマックスに至る

までに、ともかく種々の会話がなされていたことは、25行目の「会話ははずまない」と、33～35行目の「自分の気持を抑えようとやきもきしているうちに、声音がふだんとはひどく変ってきた。まもなく、レーナル夫人の声音もふるえをおびてきたが、ジュリヤンはそれに気がつかなかった」から窺い知れる。弾まない会話であったり、震える声音であったりしても、会話はあくまで進行していたのである。けれども、その会話の内容への言及が、テキストのなかで一切なされていない。また、レーナル夫人の手を握り締めることに成功したジュリヤンと、当の夫人とが、「デルヴィル夫人に感づかれぬように、口をきかなくてはいけないと思った。大きくて、はりのある声が出た。これに反して、レーナル夫人の声ははげしい興奮を包みきれなかった」(54～57行目)とあるように、デルヴィル夫人を交えた会話をともかく進めていることも見て取れる。

そのあとに、デルヴィル夫人の言葉が間接話法で記されていることは、すでに述べたとおりである。こうした「地の文」の最中であって、「たしかにすこし気分が悪いんですけど、風に当たっていたほうが気持ちいいの」(66～67行目)というレーナル夫人の言葉が、鉤括弧を伴う形で浮き彫りにされている。だからこそ、この言葉は本テキストの絶頂を成している。ここまでの地の文はすべて、このクライマックスを築き上げるための口実のようなものだとすら見なされ得る。

また、ストーリー・ラインにおいても、その間の事情は如実に窺い知れる。レーナル夫人の手を握り締めるというジュリヤンの目的には、その達成を妨げようとする2つの障碍が立ちはだかる。

1つはジュリヤン自身の「気おくれ」(35行目)である。「義務が気おくれと交える必死の果合いはあまりにも苦しかった」(35～36行目)とあるように、誇り高いジュリヤンはまた繊細な心の持ち主でもある。それでも、レーナル夫人の手を握ることに、やっとの思いで成功する。「ジュリヤンの心はうれしさにあふれた」(53行目)との言辞に込められた彼の心境を、私たち読者も我がことのように分かち合う。なぜなら、私たちは、主人公ジュリヤンにほとんど絶え間なく感情移入を行っているからである。

もう1つの障碍はデルヴィル夫人の存在である。「はげしい興奮を包みきれない」(57行目)レーナル夫人の変化に気づいたデルヴィル夫人は、レーナル夫人の気分が優れないのだと察して、「家に戻ったら」(58行目)と勧める。それを「危険」(58行目)ととらえたジュリヤンが、「自分に委ねられていた手をぐっと握りしめた」(64行目)ところ、レーナル夫人は「たしかにすこし気分が悪いんですけど、風に当たっていたほうが気持ちいいの」(66～67行目)とデルヴィル夫人に応じる。

このように2つの障碍を主人公が乗り越えた結果として、最終文の「この言葉でジュリヤンの幸福は確かなものとなり、このとき、それは絶頂に達した」(68～69行目)とのクライマックスが訪れるわけだから、本テキストのドラマチックな性質は瞠目に値する。もっとも、主人公が種々の障碍を乗り越えていくという展開は、冒険的要素が多少なりとも含まれている小説にあつては重要な側面である。

III まとめ

話法にも種々の形態があることは、『読み解く』第2章ですでに明らかにした。しかし、非話法的部分については、純然たる空間描写のほかに、登場人物の情動が昂っている箇所もまた、それに相当することが前節で明らかになった。筆者にとっては、この発見は貴重である。『読み解く』で明瞭に把握できていなかったことを、今回の分析で明確にとらえることができたからである。また、人物の内面が理性と感性から成り立っていることも、はっきりと認識できた。

それにしても、小説文での直接話法の使われ方の巧みさには驚かされる。『読み解く』第2章では、司祭による主人公一家への訪問が描かれており、だから、そこではいろんな言葉が飛び交っていたはずである。けれども、ナレーターは、ほぼ一貫して、主人公ジャンヌの将来の伴侶となる、ラマール子爵との関わりのうえで直接話法を使用していた。そして、そこからは語り口の滑らかさが醸成されていた。

それに対して、本テキストにおける語り手は、地の文を連ねていった最後に1箇所だけで直接話法を用いている。ジュリヤンが自分の目的をついに達したところの1箇所だけである。すでに触れたことなので繰り返さないが、そこから生まれるドラマチック性は私たち読者を刮目させる。

いずれにしても、小説文の語り手が話法をいかに効果的に駆使するかには感心させられる。ストーリー展開のうえで重要なところだけに直接話法を充てるという、ストイックな語り口に私たちは魅了される。逆に言えば、そのような語り口でないと、ナレーターは読者の関心を惹きつけておくことができないものなのだろう。

第3章 空間構成

● 前章からの梗概

菩提樹の下の闇のなかで、はじめてレーナル夫人の手を密かに握り締めることに成功した日から4日後に、やはり菩提樹の下での夕涼みの折、レーナル夫人は今度は自分のほうからジュリヤンの手を取って握り締める。そのとき、ジュリヤンは「この女をおれのものにするのがおれの義務だ」と決心する。その決心には、家庭教師の職についてのも夫人との恋愛のための止むなき措置だったのだと、将来、出世したときに、言い訳ができるようにしておきたいという下心も混じっていた。その2日後の夕涼みのときに、ジュリヤンはレーナル夫人に「今夜二時に、お部屋へ参ります」とささやき、夫人を驚かせてしまう。下掲のテキストは、その予告どおりにジュリヤンがレーナル夫人の部屋に忍び込んでいき、彼にとってはじめての愛の営みを交わした直後の、夫人の部屋での場面からはじまっている。3行目の「愚かなふるまい」とは、15行目の「経験を積んだ男に思われたいという愚かな考え」から発するジュリヤンの挙措のことで、「もっとも甘美な瞬間においてさえ、ジュリヤンは妙な自尊心にとらわれていて、あくまで女を征服することに慣れた男の役割を演じているつもりだった」(上巻130頁13～14行目)にもあるように、持ち前の極度の自尊心からくる彼の不自然な挙止を指している。

● テクスト (上巻 132 頁 8 行目～ 135 頁 10 行目)

さいわい、ジュリヤンは体面を保つことができたが、それというの
も、レーナル夫人があまりにも感動して取り乱し、一瞬にしてこの男
がこの世におけるすべてのものとなったため、その愚かなふるまいに
気がつくどころではなかったからなのだ。

夜が白むのを見て、彼女はジュリヤンに引きとってくれと頼みなが 5
らも、

「まあ！ 困ったわ、もし主人にも音を聞かれたら、おしまいだわ」

ジュリヤンは気のきいた文句を考える余裕があったので、こんな文
句を思い出した。

「命が惜しいのですか？」 10

「ええ、惜しくてたまらないわ、こうなってみれば！ でも、あなた
を知ったことを悔んでるわけではないのよ」

ジュリヤンは、わざと明るくなってから危険を冒して引き上げるの
が、威厳のあるやりかただと思った。

経験を積んだ男に思われたいという愚かな考えから、自分のごく些 15
細なふるまいにも注意を怠らなかったが、それが一度だけうまく役に
たった。昼食でレーナル夫人とまた顔を合わせたときの、ジュリヤン
のふるまいは慎重そのものだった。

夫人のほうは、耳のつけねまで赤くしないではジュリヤンに目を向
けることができなかったが、また一方、ちょっとでも目をそらすと、 20
生きた心地がしなかった。取り乱しているとは、自分でも気がつきな
がら、それを隠そうと思って、かえってますます取り乱してしまう。
ジュリヤンは、たった一度、目を上げて夫人を見たきりだった。はじ
めは、レーナル夫人も相手の慎重さに感心した。やがて、一度視線を
投げたきりで、見返してくれないのを知って、ふと心配になっ 25
た。《もう愛してはくれないのだろうか？ あのひとに比べてあたし
は年をとりすぎている。十も年上なんだもの》

食堂から庭に出るとき、彼女はジュリヤンの手を握った。この突拍

子もない愛情のしるしに驚きながらも、相手を眺めるジュリヤンの目は愛欲で輝いていた。昼食のとき、ほんとうに美しいなと思いがら、目は伏せても、相手の魅力をひとつひとつ思い出していたからである。そのまなざしに、レーナル夫人はほっとした。不安がすっかり取り除かれたわけではないが、その不安が夫に対する自責の念をほとんど取り除いてくれた。

昼食のとき、当の主人はなにも気がつかなかったが、デルヴィル夫人のほうはそうでなかった。レーナル夫人が誘惑に負けそうだと思った。親友のこととなれば、思いきって積極的に出ざるをえない。そこで、レーナル夫人に向って、その日一日、その身に迫る危険をそれとなく、醜悪な姿で描いてみせた。

レーナル夫人は、ジュリヤンとふたりきりになるのが、待ち遠しくてならなかった。まだ自分を愛していてくれるのかどうか、きいてみたいのだ。いつもは気立てがやさしいのに、いくたびか親友に向って、つい、ああ、うるさいというそぶりをしかけた。

その夜、庭に出ると、デルヴィル夫人はうまく立ちまわって、レーナル夫人とジュリヤンのあいだに割りこんでしまった。せっかく、ジュリヤンの手を握り、それを唇にあてるうれしさを心楽しく思い描いていたのに、レーナル夫人は言葉ひとつかけられない。

邪魔されたので、ますます不安になった。ひどく後悔していることがあった。前の晩、ジュリヤンが自分の部屋にはいつてきたとき、その無謀なふるまいをあまりきつく咎めすぎたので、今晚は来ないのではないかと心配だった。早目に庭から引き上げて、自分の部屋に閉じこもった。だが、待ちきれなくなって、ジュリヤンの部屋まで出かけていき、その扉に耳を押しあてた。不安と愛欲に身をさいなまれながらも、思いきってはいっていけなかった。あまりにもあさましすぎるふるまいであるような気がした。そういうことが、田舎では、いつも話の種にされるからである。

召使が全部寝てしまっているわけではない。用心から自分の部屋に

引き返した。待つあいだの二時間は苦しみの二世紀だった。

だが、ジュリヤンはみずから義務と呼んでいるものにきわめて忠実
だったから、自分でやろうときめたことは正確に実行した。 60

一時が鳴ると、部屋からそっと抜け出し、一家の主人がぐっすり寝
こんでいるのを確かめたうえで、レーナル夫人の部屋にあらわれた。
その日は女のもとの前の日より楽しく過した。演じるべき役割のこ
とをそれほど考えなかったからである。見る目も聞く耳も、もてたの
だ。レーナル夫人が自分の年のことをいったので、やや自信を得た。 65
「ほんとに！ あなたより十も上なんですもの！ どうしてあなたか
ら愛してもらえるでしょう！」と、夫人はなんどもいったが、下心が
あったからではなく、そのことが頭にこびりついていたからである。

I 『読み解く』第3章の概念装置

小説文ではいろんな空間が描かれる。その諸空間のなかで、登場人物たちは
佇立したり行動したりする。

まず「客観的」な空間描写が挙げられる。「客観的」な空間とは、登場人物
たちを取り巻く事物というほどの意味である。多かれ少なかれ彼らに自分を同
化しつつ、断章を読み進めている私たち読者も、それぞれの事物を彼らの目線
に立って眺めることになる。急激な空間変化が描かれていれば、私たちも彼ら
の驚きを分かち合う。空間描写が等閑に付されていれば、私たちも空間という
要素の存在を忘れ去ってしまう。あるいは、空間の存在を自明なこととして受
け入れる。

概して小説文は、戯曲や詩文と比べて、空間描写が精緻である。戯曲では主
として登場人物たちの言動に意が注がれる。その結果、空間描写はむしろ蔑ろ
にされがちである。一方、詩文では、事物と詩人自身との交感が述べられるこ
とが多い。そこには登場人物が原則として不在であって、そのために、彼らを通
して自由に空間を迫体験することが読者には許されない。小説というジャンル
は、雄大さと変幻自在さを備えた空間が喚起されるための、ほかに類を見な

い恰好な場である。

ところで、小説文における空間描写はほとんど常に二面的である。「客観的」であると同時に「主観的」でもある。たとえば、もっぱら風景そのものが言及されていれば、それは「客観的」である。そうではなくて、風景を眺める登場人物たちの感覚や内面に力点が置かれていれば、その描写は「主観的」である。もっとも、所与の事物が「客観的」であるか「主観的」であるかは、にわかに決めがたいことも多い。

空間の描写と登場人物の心理とのあいだに呼応関係があれば、前者は「主観的」な性質を帯びる。両者はマッチし合う。そして、そこには象徴的相乗効果が生まれる。たとえば、温かなところに男女2人がいて、彼らが睦まじく語らうならば、その2つの事象は、厳密には別々のものでありながらも、相互に指呼び合い、象徴的関係を結び合い、私たちの脳裡で融合する。

また、空間のこのような象徴性とは別のもう一つの意味においても、小説文に描かれる空間はしばしば「主観的」である。「目の前に」とか「両側に」とかの片言隻句が文章中に差し挟まれているとき、それらはいくまでも「登場人物の目の前に」「登場人物の両側に」の意味で用いられている。こうした技巧は、読者を登場人物の感覚へ惹き込むうえで効果的である。

「主観的」な空間のもう一つのバリエーションとして、登場人物の脳裡で繰り広げられる空間がある。つまり、登場人物によって想像される空間である。その想像的空間の如何は、登場人物の心性を推し測るためのバロメーターとなる。想像の翼が高々と舞い上がれば、その人物の、たとえばロマンチックな性質が露になるし、想像力を発揮する頻度と度合が低ければ、その人物の現実的な性向が露呈される。

だから、ストーリー展開との関わりのうえで、この「想像的」な空間が大きな役割をはたすことは、容易に推測できる。たとえば、出世を夢見る私たちの主人公ジュリヤンは、自分では一端の策略家だと思っているが、多分にロマンチックな人物である。そのために、『赤と黒』のストーリー・ラインもまた波乱に富むことになる。

II テクストの分析

ここのテキストには、即物的な空間として、「レーナル夫人の寝室」「食堂」「食堂からの庭への出口」「昼間の庭」「夕涼みの庭」「夫人の寝室」「ジュリヤンの寝室の扉付近」、そしてふたたび「夫人の寝室」というふうには、いろんな場所が次々と出てくる。また、全体は、「レーナル夫人の寝室」から始まり、やはり「夫人の寝室」で終わっている。

一見ごく当然のように思われるこの回帰構造は、実際には、特にレーナル夫人の心理面においてドラマチックである。ジュリヤンに恋する夫人は、どの場所においても心静かでいられない。

「食堂」では、「夫人のほうは、耳のつけねまで赤くしないでジュリヤンに目を向けることができなかったが、また一方、ちょっとでも目をそらすと、生きた心地がしなかった」(19～21行目)の文で始まる1段落全体が、「心配」(25行目)の虜になっているレーナル夫人の、穏やかならぬ心境を彷彿とさせている。

「庭への出口」では、その手を自分から握った「ジュリヤンの目が愛欲で輝いていた」(29～30行目)ので、夫人は一応のところ安堵の胸を撫で下ろす。

「昼間の庭」では、デルヴィル夫人が、「レーナル夫人に向って、その日一日、その身に迫る危険をそれとなく、醜悪な姿で描いてみせる」(38～39行目)のだが、レーナル夫人は「いつもは気立てがやさしいのに、いくたびか親友に向って、つい、ああ、うるさいというそぶりをしかけた」(42～43行目)とあるように、夫人の心はジュリヤンへの愛情で占有されてしまっている。

「夕涼みの庭」では、デルヴィル夫人が「うまく立ちまわって、レーナル夫人とジュリヤンのあいだに割りこんでしまう」(44～45行目)。そこで、やむなくレーナル夫人は「早目に庭から引き上げて、自分の部屋に閉じこもって」(51行目～52行目)ジュリヤンが来るのを心待ちにする。

けれども、待ち切れないので、夫人は「ジュリヤンの部屋まで出かけていき、その扉に耳を押しあてた。不安と愛欲に身をさいなまれながらも、思いきってはいつて」(52行目～54行目)いけないで、自分の部屋に戻る。

前の晩とこの日の晩とのあいだには、これだけの客観的空間が出てくる。どこにいても、ジュリヤンに恋するレーナル夫人の遣り切れない思いは募るばかりである。どの空間も、自分の恋心を満たし得ない焦燥感に囚われている夫人の心情を喚起している。レトリックで言われる反復法が見事なまでに駆使されている。

もっとも、「ジュリヤンの寝室の扉付近」の件(52～58行目)は、そのなかでも群を抜いて際立っている。

だが、待ちきれなくなって、ジュリヤンの部屋まで出かけていき、その扉に耳を押しあてた。不安と愛欲に身をさいなまれながらも、思いきってはいついけなかった。あまりにもあさましすぎるふるまいであるような気がした。そういうことが、田舎では、いつでも話の種にされるからである。／召使が全部寝てしまっているわけではない。用心から自分の部屋に引き返した。待つあいだの二時間は苦しみの二世紀だった。

ここにおいて、レーナル夫人の恋慕の苦しきは絶頂に達している。「待つあいだの二時間は苦しみの二世紀だった」との誇張的表現が端的にそれを物語っている。「二時間」を「二世紀」になぞらえるとは、けだし、思い切った言い草だ。

見られるように、この断章に出てくる種々の空間は、レーナル夫人の募りゆく恋心を描くための支柱として機能している。空間それ自体には、格段の象徴性が与えられていないけれども、レーナル夫人の不倫の愛を蔭から助長する仕掛けとして重要である。

*

小説文が呈する空間的事物には、登場人物たちの「習慣性」がこびりついていることが多い。

テキスト冒頭のレーナル夫人の部屋は、最初の晩こそジュリヤンにとって目新しい空間であったが、次の晩に「レーナル夫人の部屋にあらわれた」(62行目)ときには、彼にとってすでに馴染みの空間に変貌している。この変化に呼応するように、夫人との交情に対するジュリヤンの心性にも大きな変容が認められる。

その日は女のもとで前の日より楽しく過した。演じるべき役割のことをそ

れほど考えなかったからである。見る目も聞く耳も、もてたのだ。レーナル夫人が自分の年のことをいったので、やや自信を得た。

(63～65行目)

あるいは、菩提樹の木蔭で、レーナル夫人とジュリヤンが手を握り合うことも、すっかり彼らの「習慣」になっている。それでも、レーナル夫人の挙止に注意を怠らないデルヴィル夫人は、その習慣に邪魔立てをする。もっとも、そうしたデルヴィル夫人の努力も、レーナル夫人の恋心を煽るばかりであることは、前述のとおりである。

その夜、庭に出ると、デルヴィル夫人はうまく立ちまわって、レーナル夫人とジュリヤンのあいだに割りこんでしまった。せっかく、ジュリヤンの手を握り、それを唇にあてるうれしさを心楽しく思い描いていたのに、レーナル夫人は言葉ひとつかけられない。／邪魔されたので、ますます不安になった。前の晩、ジュリヤンが自分の部屋にはいつてきたとき、その無謀なふるまいをあまりきつく咎めすぎたので、今晚は来ないのではないかと心配だった。

(44～51行目)

レーナル夫人にとって、ジュリヤンとの交情はすでに半ば習慣となっていることが窺える。あるいは、夫人はそれを習慣にしたいと願っている。

一方、デルヴィル夫人と2人である空間は、ジュリヤンに恋慕を寄せる夫人にとって厭わしいものに変貌している。これは習慣が途絶する例であり、私たち読者はそこにおいて驚きを禁じ得ない。

レーナル夫人は、ジュリヤンとふたりきりになるのが、待ち遠しくてならなかった。まだ自分を愛していてくれるのかどうか、きいてみたいのだ。いつもは気立てがやさしいのに、いくたびか親友に向って、つい、ああ、うるさいというそぶりをしかけた。

(40～43行目)

また、食堂から庭に通じる戸口では、夫人の眼がジュリヤンの眼に注がれる。

食堂から庭に出るとき、彼女はジュリヤンの手を握った。この突拍子も

ない愛情のしるしに驚きながらも、相手を眺めるジュリヤンの目は愛欲で輝いていた。昼食のとき、ほんとうに美しいなど思いながら、目は伏せても、相手の魅力をひとつひとつ思い出していたからである。そのまなざしに、レーナル夫人はほっとした。

(28～32行目)

ここでもまた、習慣が断ち切られている。たとえば、「愛欲で輝くジュリヤンの目」は「庭への戸口」にいくばくかの神話性を与えている。つまり、「戸口」がジュリヤンとレーナル夫人にとって掛け替えのない空間になったということだ。それは、2人に感情移入している私たち読者にとっても同様である。

もっとも、ヴェルジーの別荘にある「庭への戸口」は、『赤と黒』の全編をとおしても、ここの1箇所にはしか現れない。それは「食堂」についても言えることである。だから、これらの空間的事物は、ストーリー展開のうえで便宜的な存在だとも言える。もっとも、語り手が、そうした瑣末な空間的事物であっても、自然なストーリー・ラインを築くために、それらを周到に準備したことに変わりはない。

*

最後に想像的空間については、本テキストの35～39行目にこうある。

昼食のとき、当の主人はなにも気がつかなかったが、デルヴィル夫人のほうはそうでなかった。レーナル夫人が誘惑に負けそうだと思った。親友のこととなれば、思いきって積極的に出ざるをえない。そこで、レーナル夫人に向って、その日一日、その身に迫る危険をそれとなく、醜悪な姿で描いてみせた。

レーナル氏とデルヴィル夫人が好対照を成している件である。「当の主人」の鈍感さとデルヴィル夫人の明敏さが対を形成している。デルヴィル夫人は、「レーナル夫人に向って、その日一日、その身に迫る危険をそれとなく、醜悪な姿で描いてみせた」とあるが、その「姿」は、デルヴィル夫人の脳裡にある想像的空間である。親友の言葉を聞くレーナル夫人にとってもそうである。もっとも、ジュリヤンのことを切に思うレーナル夫人にとっては、その言葉は空疎なものでしかない。

デルヴィル夫人が口にする「醜悪な姿」とは、具体的に何なのかは窺い知れない。道徳から外れた不倫の恋が人を導き込む危険のことだろうと、漠然と推測できるばかりである。いずれにしても、「醜悪な姿」についての想像をナレーターは読者に任せている。ジュリヤンへの恋慕の情に浸り切っている、レーナル夫人の姿の描写を軸として展開する本テキストのストーリー・ラインのうえで、デルヴィル夫人が描く「醜悪な姿」は水泡のようなものだからである。

また、デルヴィル夫人が夕涼みの場所で行く行動も儂いものでしかない。

その夜、庭に出ると、デルヴィル夫人はうまく立ちまわって、レーナル夫人とジュリヤンのあいだに割りこんでしまった。せっかく、ジュリヤンの手を握り、それを唇にあてるうれしさを心楽しく思い描いていたのに、レーナル夫人は言葉ひとつかけられない。

(44～47行目)

ジュリヤンの手を握るのを「心楽しく思い描いていた」レーナル夫人の想像もまた水泡のように費える。もっとも、夫人の想像的空間は、より激烈さを増していく。この引用文の直後に「邪魔されたので、ますます不安になった」との1文があることから、それは歴然としている。

結局のところ、デルヴィル夫人の「積極的」(37行目)干渉は裏目に出てばかりいる。それによって、レーナル夫人の恋心が却って掻き立てられる。デルヴィル夫人の思い描く想像的空間は、レーナル夫人が憧憬する想像的空間を煽り立てて、その憧憬をより確固としたものにする。

想像的空間という要素は、このテキストにあっては、2人の夫人のあいだにある溝を克明にするうえで効果的に機能している。

Ⅲ まとめ

小説文における空間は、定冠詞的なものと不定冠詞的なものとに分けられる。定冠詞的なものとは、いわゆる既視的空間のことであり、私たち読者にとってすでに「飼い馴らされた」対象である。不定冠詞的なものとは、目新しい空間のことであり、私たちにとって多かれ少なかれ驚きの対象となる。

もっとも、前者は、不定冠詞的な対象になる契機を常に孕んでいる。「菩提樹の下の暗がり」は、読者の胸中ですでに馴染みとなっていた。けれども、デルヴィル夫人が、恋する2人のあいだに割り込んでしまったとき、不定冠詞的なものへと変貌する。つまり、私たち読者は、少なからず新鮮な驚きを喫する。この先はどうなるのだろうかとの好奇心を抱く。

「庭への出口」もそうだ。この存在は、本テキストにはじめて出てくるのだが、そういうものがあるとしても一向におかしくないという意識が読者の脳裡で働く。だから、この対象も、私たちの胸中ですでに「飼い馴らされた」それである。本稿第1章で触れた「反復的内容への1度限りの言及」と、事情はよく似通っている。ところが、この陳腐な対象は、にわかには神話性を帯びる。その場所でレーナル夫人はジュリヤンの手を握り、「相手を眺めるジュリヤンの目が愛欲で輝いている」(29～30行目) ことを見定める。

このように、何気ない空間的事物に神話性を付与することもまた、小説文の特徴の1つだ。『読み解く』第3章のテキストは、うら若い男女が田園と森を彷徨する模様を描いていた。そこでは空間の有り様が目まぐるしく変化していた。けれど、雄大な空間描写であった。けれども、そのテキストを本稿のそれと比較しても、後者がドラマチック性において遜色するわけではない。レーナル夫人に感情移入をしている私たち読者は、彼女の喜怒哀楽を我がことのように「実感」するからである。

空間の諸要素は、登場人物の内面と結び付いてはじめて劇的なものに変容する。そういう見地に立てば、客観的空間の雄大さの如何はあまり重要だと言えなくなる。

——第3章おわり——

主要参考文献

- Bourneuf (Roland) et Ouellet (Réal) : *L'univers du roman*, PUF, 1975.
- Fontanier (Pierre) : *Les figures du discours*, Flammarion, 1977.
- Genette (Gérard) : *Figures III*, Seuil, 1972.

『赤と黒』の構造 (一) (吉田)

- Lodge (David) : *The Art of Fiction*, Penguin Books, 1992.
- Stalloni (Yves) : *Dictionnaire du roman*, Armand Colin, 2006.
- 野内良三『レトリック辞典』、国書刊行会、1998年。
- 野内良三『レトリックと認識』、日本放送出版会、2000年。
- 吉田廣「二つの『石榴』——日仏詩文の比較対照的分析の一例——」、大阪経済法科大学論集第55号、1994年。
- 吉田廣『「女の一生」を読み解く——フランス小説の徹底分析——』、大阪経済法科大学出版部、2008年。
- 吉田廣「小説文の統合性——『雁』をめぐって——」、大阪経済法科大学論集第98号、2009年。